

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた 通常学級の授業の考察

— 生徒、教員対象のアンケート調査を基に —

共同研究

北海道／ニセコ町立ニセコ中学校 教諭 中村 洋

申請時：北海道／寿都町立寿都中学校 教諭

概要

本研究では、「特別支援教育の視点を通常学級の授業に取り入れることは、すべての生徒にとってプラスの効果はあってもマイナスの効果はない」との仮説の元、通常学級の授業のユニバーサルデザイン化に取り組んだ。また、実践と合わせ、英語を苦手と感じる生徒が中学校の前半から増えだすという実態を鑑み、生徒たちはどのような時に学習の困難さを感じるのか、どのような配慮を求めているのかを明らかにすべく、本格的な英語学習を始めた中学校1年生を対象にしたアンケート調査を継続して行った。さらには、英語教員を対象にしたアンケート調査も行い、生徒たちが求めている配慮と、教員が行っている支援のあり方の差異について比較・検討を行った。結果、板書の際のチョークの色遣いや、授業案を作成する際に生徒の認知特性に合わせるなど、教員の意識的な働きかけで解決できる項目も少なくはないことが明らかとなった。

1 はじめに

通常学級の中にも、LDやADHD等の発達障がい疑われ、学習に困難を伴う児童・生徒が6%程いるといわれている（文部科学省，2003，2012）。しかし、彼らの中には、支援がされないまま通常学級で授業を受けている生徒もいる。LD、ADHD等が正式な通級指導の対象に加わることとなった2006年度には、文部科学省が15,000人規模の通級担当教員の増員を計画していたが、財政面

の理由により282名の単年度増員配置にとどまった。このような現状を鑑み、本研究では、現行の教育制度の下、職員定数や教室環境の整備など、物理的な要因のために一部の学校に限定されるのではなく、広く普遍的に通常学級の授業にも取り入れやすく、すべての生徒にとっても有益な指導の工夫や支援のあり方について考察していく。

2 研究の目的

英語の授業では、学年が進むにしたがい苦手意識をもつ生徒が多くなるといわれている（ベネッセ教育総合研究所，2014など）。その背景には、次第に難しくなる言語材料や語彙、あるいはまた、日本語と英語との言語学的な距離の問題もある。だが、これまでの研究から、ディスレクシア（Dyslexia）といわれる、知的能力や一般的な理解能力などに特に異常がないにもかかわらず文字の読み書き学習に著しい困難を抱える障がいの出現率が、日本では5%程度であるが、英語圏では10%～20%という高い割合であり（村上，2012；瀧沢，2013など）、これも大きな原因の一つとして考えられる（河野，2012）。また、日本語においては読み書きで困難が顕在化しなくても、英語を学習する際に困難さが現れる事例も少なくはない（河野，2012）。さらに、英語という言語は音韻の複雑さのため、ディスレクシアの学習者にとっては困難な聴覚的処理を多く含むと考えられているが、英語学習の支援に関する研究

は進んでいない（河野，2012）。

このように、発達障害者支援法（2005年4月施行）や障害者差別解消法（2016年4月施行）などの法整備が進んでいるにもかかわらず、学校教育現場では未だに支援の方法があまり浸透せず、学習上の様々な困難を抱えた学習者が少なからず存在している。全ての学習者が同じスタートラインに立って学習することができる環境を整えるためにも、「特別支援教育の視点を通常学級の授業に取り入れることは、すべての生徒にとってプラスの効果はあってもマイナスの効果はない」という考えに立ち、授業のあり方を考えることは有効なことである。この考え方は、アメリカのメースが1974年に提唱した、障がいの有無に関係なく、すべての人が使いやすいように製品・建物・環境などをデザインする、ユニバーサルデザインという考えに通じるものであり、学校教育現場においても、このユニバーサルデザインを取り入れた授業を考えていく必要がある。

これらのことを踏まえ、本研究では、文字に関する部分に着目し、特別支援教育の視点、つまり、ユニバーサルデザインを取り入れた英語の授業をどのように考えていくべきかを考察していく。そのために、大きく分けて三つの研究目的を設けた。

まず、授業中、板書された文字がチョークの色によって生徒の見え方に差異があるのか調査する。ディスレクシアのような文字の読み書きに困難を抱えている生徒への配慮はもちろん、色覚障がい等、それ以外の生徒にとっても、黒板の文字の見えづらいは大きな問題になる。そのため、全ての生徒が黒板の文字を読みやすくする色遣いはあるのかどうかを調査していく。

次に、英語学習の初期段階からの文字の導入の

利点を考察していく。平成20年改訂の小学校学習指導要領では、外国語活動での文字の扱いは、「児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」（文部科学省，2008）とされ、文字の指導が避けられる傾向にある。これは、ディスレクシアにとっては有益かもしれないが、そこに注目しすぎてしまうと自閉症スペクトラムに多い、口頭で言われても理解しにくいが目で見えて理解することは得意である、視覚優位の児童にとって逆効果な指導となる可能性がある。そのため、本格的な英語学習を始めた中学校1年生を対象にしたアンケート調査を継続して行い、学習初期段階からの文字の導入の利点について考察していく。

最後に、英語教員の視点からユニバーサルデザインを取り入れた授業への考え方について考察していく。まず、どのような時に学習の困難さを感じているのか、生徒を対象としたアンケート調査を行い、その中で見えてくる生徒が抱えている課題から、実際の英語の授業の中でどのような支援を考えていくべきかを示していく。また、教員自身が、障がいやユニバーサルデザインへの知識や理解があるのかも、ユニバーサルデザインを取り入れた授業を実践するために重要な要素となるため、それらについても調査を行い教員側の課題も明らかにしていく。

3 調査方法

本研究では、以下の5つのアンケートを実施した（表1）。対象の中学生は、文部科学省の研究指定を

■表1:アンケートの概要

内容	実施時期	対象	人数	方法
小学校での文字の扱い方	2015年4月	中学校1年生	25名	質問紙
チョークの色遣い	2015年6月	中学校1年生	25名	質問紙
チョークの色遣い	2015年6月	北海道後志管内の英語教員	21名	質問紙
授業での困り感	2015年9月	中学校1年生	26名	質問紙
ディスレクシア、 ユニバーサルデザインについて	2016年2月	全国の小学校から高校までの教員	104名	ネット調査 ^{注2)}

受け、小学校6年生で文字学習を含む教科型の英語教育を経験し、平成27年度に中学校に入学してきた生徒、26名である^{注1)}。英語嫌いとなる要因を明らかにするために、英語が苦手になり始める時期といわれる中学校1年生の1学期の後半から2学期にかけ継続してアンケートを実施した。また、教員を対象として、ディスレクシアやユニバーサルデザインに関する知識についてのアンケートを行った。

4 結果と考察

4.1 チョークの色について

4.1.1 チョークの色の見やすさ

視覚に関しては、色覚障がい²⁾の学習者への配慮も不可欠である。本研究の調査対象の生徒に、実際に何色かのチョークを用いて英語と日本語で板書をし^{注3)}、その中で読みやすい色について尋ねた。その結果、白色、黄色と比べて、他の色は、「やや読みにくい」「とても読みにくい」と答える生徒が多いことがわかった。特に、蛍光赤と青色のチョークで書いた文字が「やや読みにくい」「とても読みにくい」と答えた生徒がほぼ半数を占めていた(表2)。

調査の結果、教員が板書で使用するチョークの

色違いによって、文字の見づらさから、何らかの学習に対する困難さを感じる可能性があることがわかった。また、日本人の場合、先天赤緑色覚異常と言われる赤系統と緑系統の色の識別に困難を生じる者が多く、特に、男性では20人に1人という高い割合で出現していると言われていたが(伊賀, 2011)、この調査の結果からは、それ以上の割合で、緑色の黒板に赤系のチョークという組み合わせを「識別はできるが読みにくい」と感じている生徒がいる可能性が高いこともわかった。さらに、赤色だけではなく、その他の色も読みにくいと感じている生徒がいることがわかった。色覚障がい²⁾が広く知られるようになり、以前のように純粋な赤チョークが使用されることは稀で、蛍光色、あるいは茶系の赤色のチョークが使用されることが多くなっている。それにもかかわらず、赤系の色を読みにくいと感じる実態があり、また、それ以外の色でも読みにくいと感じている生徒もいることから、チョークの色の使い方について配慮をしていく必要があると考えられる。

また、チョークの色の読みやすさと、板書が目立つと感じるかどうかは概ね一致し(表3)、読みにくいと感じる色は、目立ちにくいと感じることがわかった。また、白色と黄色を目立つ色として挙げた者が半数以上を占めたが、その一方で、自由記述欄には「白と黄色の区別が難しい」

■表2: 黒板の文字が読みやすいチョークの色

n=25

	白色		黄色		蛍光赤		茶色系赤		青色	
	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語
とても読みやすい	16	16	13	10	3	5	4	5	2	4
読みやすい	8	5	11	12	10	7	13	10	9	10
やや読みにくい	1	4	1	2	11	11	7	7	11	9
とても読みにくい	0	0	0	1	1	2	1	3	3	2

中村・山下(2015)

■表3: 目立つ色と目立たない色

n=25

	白色		黄色		蛍光赤		茶色系赤		青色	
	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語
とても目立つ	6	8	18	16	4	3	5	6	2	2
目立つ	15	13	6	8	14	10	13	12	8	12
あまり目立たない	4	4	1	0	5	10	5	9	14	9
全然目立たない	0	0	0	1	2	1	2	2	1	2

※複数回答

「黄色と白の区別ができなかったことがあります」という回答もあった。このことから、ともに目立つという意見が多かった白色と黄色のチョークを使うと文字が読みやすくなる反面、二つの色を併用した際に区別がしづらくなる生徒がいることから、この点も板書の際に注意が必要となることがわかった。

なお、日本語と英語での違いについては、全ての調査において大きな差は見られなかった。

一方で、生徒たちが理想とする色遣いについては、表2と表3で示された通り、見やすい色は個人によって違いがあるものの、ほぼ全員が基本の文字を白色で板書してほしいという回答であった(表4)。これは、以前より多用されている、「板書の基本は白色、強調する際は白色以外」という色分けそのものであった。しかし、これは小学校入学時から、「板書の基本は白色チョーク」という環境で過ごしてきていることから、当然のことと捉えて回答した可能性も考えられる。なお、色遣い以外にも、「黒板を消すときにはきれいに消してほしい」「行間を広くとってほしい」という、特別な準備を必要とせず教員の意識で解決できる回答も得られた。

4.1.2 チョークの色に対する教員の配慮

実際に教員が授業で使用しているチョークの色

遣いに関しては、生徒が希望する色遣いとほぼ一致していることが明らかとなった(表5)。中には、赤色の代わりに、強調する文字や下線などには自前のオレンジ色を使用する教員も1名いた。自由記述欄からは、「板書を書きすぎない」(6名)、「板書をする際に使用する色を説明する」(3名)、「読みやすい色を事前に確認する」(3名)といった工夫がされていることも分かった。赤系統や青色を避ける理由としても、色覚障がいのある生徒や、後方に座る生徒の読みにくさへの配慮を挙げている教員が15名もあり、色覚障がいに対する配慮が進んでいることが読み取れる。特に、読みやすい色を事前に確認するという配慮は、英語科の授業に特化したものではなく、他の教科においても有効な配慮である。例えば、年度当初の学級開きの際に各学級担任が行うなど、学校全体としての取り組みにすることで、生徒への学習内容以外の余計な負担を排除することにつながっていくことになるだろう。

4.2 小学校外国語活動での文字導入の利点

小学校外国語活動では、文字の扱いが児童の負担につながることを懸念し、音声中心の指導を行う傾向にある。しかし、自閉症スペクトラムに多い視覚優位の児童の場合には、口頭で言われるだ

■表4: 希望するチョークの黒板の色遣い

n=25

	白色	黄色	蛍光赤	茶色系赤	青色
基本の文字(日本語)	21	2	1	0	1
基本の文字(英語)	18	1	1	3	2
強調する文字(日本語)	1	10	5	7	2
強調する文字(英語)	1	14	3	5	2
囲み線や下線	0	2	9	7	7

■表5: 授業で使用するチョークの色遣い

n=22

	白色	黄色	蛍光赤	茶色系赤	青色
基本の文字(日本語)	21	1	0	0	0
基本の文字(英語)	22	0	0	0	0
強調する文字(日本語)	1	19	5	1	0
強調する文字(英語)	1	18	6	2	0
囲み線や下線	1	7	13	3	6

※複数回答

けではなく、目で見ても理解できるような配慮をすることで英語学習の困難さを取り除くことができる可能性がある。では、実際に、児童たちは小学校での文字の扱いをどのように感じているのだろうか。中学校に入学した直後の生徒を対象に、小学校で用いていた英単語が書かれている絵カードについて四件法と自由記述を組み合わせたアンケート調査を行った。結果、絵カードに併記されていた単語の綴りを全員が好意的に捉えていた（表6）。その理由として、「単語の勉強になる」「文字があるとどうやって書かがわかるから」といった学習面でのメリットと答え生徒が7名であったのに対し、14名が「文字を見てわかる時があるから」「聞き取れなくても文字があれば理解しやすい」といった、綴りがあることで、読めない単語がある際の理解の手助けになったことを挙げていた。

対象の生徒たちは、教育課程特例校の指定を受けた小学校で、3年生から音声主体の外国語活動を行ってきた。さらに彼らが小学校6年生の時には英語教育強化拠点地域の指定も受けたことにより、教科型の英語学習も経験し、アルファベット

や基本単語を中心に「読む」「書く」の学習も経験してきた。小学校で使用している絵カードは、国際理解教育の一環だった頃はイラストのみであったが、正式な外国語活動となった際に綴りを併記した。さらに、教科型としての英語学習が始まった平成26年度からは、同じ絵カードではあるが、併記する綴りをアルファベットの大文字を学習している期間は、大文字で、小文字を学習する際には小文字にするという工夫を加えた。もちろん、単語の綴りを教えるのを目的として使用してきたわけではないが、本アンケートの結果からは、音声に加え視覚からも継続してインプットを得たことで、自然と音声と綴りの関係を習得し、ついには絵カードの英単語を学習の手助けとさえ感じるようになったと推測される。つまり、聴覚のみで物事を理解することを得意としない生徒にとっては、同時に提示されていた絵と文字が理解の手助けとなっていた可能性が考えられる。平成20年版の小学校学習指導要領では児童の負担につながることを懸念している文字の扱いではあるが、聴覚認知が苦手の児童にとって、文字を効果的に活用することが負担軽減につながる可能性も考えられる。た

■表6: 絵カードの英語を読むようにしていましたか？

n=25

とてもそう思う	21名
ややそう思う	4名

あまりそう思わない	0名
まったくそうおもわない	0名

中村(2015)

■表7: 英語学習で困難に感じる要因

n=26

	上位層	中位層	下位層	合計
英文を理解できない	5	4	4	13
教科書が大きすぎて机の上で広げられない	6	3	2	11
私語が気になって集中できない	6	3	0	9
ヒントとなる絵がないと英文を理解できない	2	1	4	7
単語が読めない	4	2	1	7
単語が書けない	5	0	2	7
CDの音声聞きとりにくい	2	2	1	5

※ 1学期末定期試験(100点満点, 平均点80.5点, 中間点90点)の結果を基に, 90点以上の上位層(13名), 67点~89点の中位層(7名), 66点以下の下位層(5名)に分類した。
中村, 山下, 沢谷(2015)

だし、視覚優位の者は視覚からの情報を処理することは得意であるが、視覚と聴覚の両方から入る情報を同時に処理するのが苦手であることも知られている（中村，2015）。これを実際の授業の場面に当てはめると、教師が板書を活用して口頭で解説を加える場面での負担が考えられる。視覚からのインプットが不十分な段階、つまり、黒板の文字を十分に読んでいない段階で聴覚からのインプットが加わると、情報をうまく統合することが出来ず混乱を招いてしまう可能性があるということである。生徒のことを考え詳細な説明を加えているつもりが、生徒の特性によってはかえって理解の妨げになる可能性も否定できない。また、ディスレクシアを抱えた生徒にとっては、文字に依存しすぎることがかえって負担になりかねないことにも注意する必要がある。

4.3 ユニバーサルデザインを取り入れた授業に対する教員の課題

4.3.1 生徒の授業での困り感と授業における支援の方向性

英語嫌いが増えると言われる中学校1年生の2学期の半ばに、生徒が授業で感じている困り感について自由記述で回答してもらった。それらの回答から共通する事項を抽出したところ、成績の如何を問わず、どの層の生徒にも共通した要因があることがわかった（表7）。

回答の中には、「教科書が大きすぎノートと並べて机に置くことが困難である」という学習以前の問題も含まれていた。また、「私語が気になる」、（その結果）「CDの音声聞きとりにくい」という回答も、教員の授業運営に対する意識の向上で解決することも考えられる。また、「単語が読めない」「単語が書けない」「絵がないと英文を理解できない」という点については、これまでは学習者の努力が足りないと考えられていた。しかし、これらに関して、実際には、学習者に内在する諸要因に起因する可能性も否定できない。

「私語が気になる」「CDの音声聞きとりにくい」という回答に関しては、自閉症スペクトラムの特性が背景にある可能性が考えられる。自閉症スペクトラムでは、音に対する感覚が非常に敏感で、多くの人が十分に我慢できる音量であっても苦痛を伴う異常な音として感じることもある。通

常、我々は生活の中で自分に必要な音とそうではない音を無意識のうちに区別し、雑踏の中でも人と会話ができている。だが、自閉症スペクトラムの場合それが機能せず、結果として、日常生活音であっても非常にうるさく聞こえ、雑踏の中では会話の声さえ理解できないということにつながってしまうのである。

次に、「単語が読めない」「単語が書けない」、「絵がないと英文を理解できない」といった部分に関しては、文字の読み書きの学習に困難さを示す障がいであるディスレクシアの可能性も考えられる。小学校で日本語を学習する際には困難さが顕在化しなくても、中学校で英語を学習する際に困難さが表れる事例も少なくはないことが指摘されている（河野，2012）。そのため、中学校の英語学習で本格的に始まる「単語を読む」「単語を書く」という文字を介在する学習において、ディスレクシアを抱えた生徒は学習に対する困難さを感じ、理解の妨げになることが考えられる。

また、表7で上げられた項目の中には、学習者の認知処理過程の様式に起因する可能性も考えられる。人間の認知処理（情報処理）過程は、継次処理（Sequential Processing）と同時処理（Simultaneous Processing）の2つに大別することができると言われている（Das，1972）。日頃の授業でも、授業案を作る際には、表7で挙げられたような困難さを緩和させるためには、継次処理様式と同時処理様式の2種類の認知処理過程の様式を考慮する必要があると考えられる。継次処理様式とは、情報を1つずつ時間的な順序によって処理する様式のことをいい、同時処理様式とは、複数の情報をその関連性に着目して全体的に処理し、空間的に統合する認知処理過程のことを表している（藤田・熊谷・柘植・三浦・星井，2008）。通常は、これらの2つの認知処理がバランス良く発達していく。しかし、発達障がいのある学習者の中には、両者のバランスが取れていない者もあり、彼らに対し不適切な指導法を用いることで、学習効果が上がらないということにつながりかねない（村上，2013）。そのため、多くの生徒がいる通常の学級の授業でも、両方の指導方法を取り入れる工夫が必要である。

4.3.2 教員の課題

日々の教育実践を行う上で、教員には多くの知識が求められているが、ユニバーサルデザインについてはどうであろうか。まずは、文字学習に関するディスレクシアについて知っているかどうかを尋ねた。その結果、知識を有している教員が、各学校種ともに半数を下回る結果となった(表8)。自閉症スペクトラムの特性はある一定の傾向がみられるが、個人によって様々な違いがある。特別支援教育が始まって久しいが、残念ながら、この特性について教員の理解がまだそれほど浸透していないという結果が得られた。しかし、ディスレクシアも学習における困難さに影響を及ぼす可能性が高いことから、授業にユニバーサルデザインを取り入れていく際には、このディスレクシアについても考慮して授業をしていく必要がある。

ユニバーサルデザインという用語に関しては、学校種を問わず高い割合の教員が知識を有していることが分かった(表9)。一方で、実際にユニバーサルデザイン化や特別支援の視点を意識した授業を行っているのかという質問に対しては、学校種によって差異がみられることも明らかとなった(表10)。

特に、授業のユニバーサルデザイン化という点において、小学校教員の意識が高いことが読み取れる。その背景には、小学校では基本的に担当する学級の学習指導や生徒指導のすべてを担当する学級担任制が行われていることが関係していると考えられる。この場合、一つの学級で一人の教員がほとんど全ての授業を行うことから、一人ひとりの児童の特性を細かく把握しやすく、それぞれの児童に合わせた指導が行いやすいという特徴がある。さらには、教室の整備、家庭との連携といった学習環境を整えやすい立場にいることも、総合的に児童の特性を把握し、それに合わせた授業

を実践することにつながっていることも考えられる。

現在、多くの場面で小学校と中学校の連携の推進がこれまで以上に求められているが、それには学習内容や指導方法の有機的な接続はもちろん、小学校時代に蓄積された児童一人ひとりの特性を、中学校への進学時にしっかりと引き継ぐことも含まれている。このことが、「中1ギャップ」とも呼ばれる中学校進学後の学問的、心理的なギャップを取り除く、あるいは小さくすることに結びつく。また、特に英語科に関しては、小学校高学年での英語の教科化や、中学年への活動型の導入が現実的となる中、中学校教員がこれまでに蓄積してきた教科としての英語の指導法や、評価方法について、小学校教員と交流を深めることも大切である。当然のことながら、同時に、中学校から高校へ進学する場合にも同様の連携が必要となってくる。

5 結論と今後の課題

本研究では、生徒や教員を対象に実施したアンケート結果を基に、通常学級の授業にも取り入れやすく、すべての生徒にとっても有益な指導の工夫や支援のあり方、つまり、ユニバーサルデザインを取り入れた指導について考察した。その中で二つの方向性を示唆することができた。

まず、学校教育全体としたユニバーサルデザインの考え方である。その一つの例として、本研究では、板書で用いるチョークの色を取り上げた。アンケート結果からは、白色と黄色以外の色のチョークは読みづらいつ感じたり、目立ちづらいつ感じたりしている生徒が多くいることがわかった。この結果からは、白色と黄色のチョークを中心に

■表8: ディスレクシアという用語の知識

n=104

	よく知っている	少しは知っている	あまり知らない	全く知らない	全体
小学校教員	8(25.8%)	6(19.4%)	6(19.4%)	11(35.5%)	31(100.0%)
中学校教員	5(11.9%)	6(14.3%)	9(21.4%)	22(52.4%)	42(100.0%)
高校・高専教諭	9(29.0%)	5(16.1%)	5(16.1%)	12(38.7%)	31(100.0%)
全体	22(21.2%)	17(16.3%)	20(19.2%)	45(43.3%)	104(100.0%)

用いれば見えやすい板書になるということがわかるが、一方で、白色と黄色のチョークを併用した場合に区別がしづらいという声もあった。つまり、チョークの色一つをとっても、児童、生徒にとって様々な感じ方があることがわかる。教員にとって、授業をユニバーサルデザイン化することは難しく思われるかもしれない。しかし、本研究の結果も参考に、チョークの色遣いに配慮するだけでも、ユニバーサルデザインを取り入れた授業を始めることができるのではないだろうか。

二つ目は、英語の授業内容に関するユニバーサルデザインの考え方である。小学校外国語活動では、児童の負担になることから文字をあまり扱わないようにされてきたが、実際には文字が学習の補助となり、文字が負担軽減につながる可能性があるという結果が得られた。これは、視覚的なインプットを得意とする児童がそのような傾向を示した可能性がある。

このように児童、生徒の負担になると考えられて避けられていたことが、実際には、児童、生徒の特性によっては負担を増やす結果になることもあることがわかった。本研究で扱った小学校における文字指導を例にすると、教員が指導することなく一方的に避けるのではなく、児童が個々の認知様式に合わせ、単語を音声から学ぶのか、あるいは文字から学ぶのかを、授業の中で自然と選択

できるような配慮を行っていくことが必要である。

また、中学校の英語の授業において、自閉症スペクトラムやディスレクシア、認知処理過程が学習の困難さに影響している可能性があることも示唆された。しかし、生徒の努力だけではどうすることもできない要因、例えば、集中力のなさは自閉症スペクトラムの特性、文字の読み書きについてはディスレクシアが要因となっている可能性も考えられる。このような生徒に対しても、通常の授業の中で、できる限り他の生徒と同じように学習できる環境を整えていく必要性がある。小学校外国語活動では、音声中心のため視覚からのインプットを得意とする児童に学習への困難さが生じ、一方で、中学校では読み書きの多さからディスレクシアを抱えた生徒が学習への困難を生じる可能性があるように、それぞれの特性に対応したユニバーサルデザインを取り入れた授業が重要ではないだろうか。そのためには、本研究で取り上げたディスレクシアのように、まだ教員に浸透していない障がいに対する知識や理解、児童、生徒一人ひとりの特性をしっかりと認識することが求められる。

本研究は、アンケート調査を主体とした。今後はユニバーサルデザインを取り入れた授業実践を行い、児童、生徒にどのようなメリット、デメリットがあるかの分析を行い、改善していく、

■表9: ユニバーサルデザインという用語の知識

n=104

	よく知っている	少しは知っている	あまり知らない	全く知らない	全体
小学校教員	21(67.7%)	7(22.6%)	3(9.7%)	0(0.0%)	31(100.0%)
中学校教員	25(59.5%)	15(35.7%)	2(4.8%)	0(0.0%)	42(100.0%)
高校・高専教諭	16(51.6%)	12(38.7%)	3(9.7%)	0(0.0%)	31(100.0%)
全体	62(59.6%)	34(32.7%)	8(7.7%)	0(0.0%)	104(100.0%)

■表10: 授業のユニバーサルデザイン化

n=104

	大変意識している	少しだけ意識している	ほとんど意識していない	まったく意識していない	全体
小学校教員	9(29.0%)	15(48.4%)	6(19.4%)	1(3.2%)	31(100.0%)
中学校教員	9(21.4%)	17(40.5%)	12(28.6%)	4(9.5%)	42(100.0%)
高校・高専教諭	4(12.9%)	10(32.3%)	11(35.5%)	6(19.4%)	31(100.0%)
全体	22(21.2%)	42(40.4%)	29(27.9%)	11(10.6%)	104(100.0%)

PDCAサイクルを取り入れた調査研究も必要になっていくだろう。また、各学校における具体的な実践例や、そこで明らかとなる課題などを詳細に分析していく必要もあろう。本研究の結果からは、例えば、読み書きの技能と密接にかかわる、ディスレクシアに関する理解があまり深まっていないということがわかった。教える側の知識の向上のため、研修のあり方の考察も求められるだろう。

通常学級の授業をユニバーサルデザイン化することは、今後ますますその重要性を増すことと考えられる。そのためにはまず、生徒たちがどのような場面で困難さを感じ、どのような配慮や支援を求めているのかを詳細に分析する必要がある。もちろん、ゼロから新たに授業環境や指導方法を構築していくのではなく、これまでの中学校や高校での実践から得られた成果と課題から得られる示唆も少なくはない。今後も、これまではあまり

注

- 1) 平成27年度の入学生は26名であるが、1名は小学校6年生の後半より中学校1年生の6月まで入院による長期の欠席をしていたため、対象人数が一部異なる。
- 2) インターネット調査会社に依頼し、インターネットを通じた調査を行った。

参考文献

- * ベネッセ教育総合研究所.(2014).『中高生の英語学習に関する実態調査 2014』.
http://berd.benesse.jp/up_images/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_ALL.pdf (2016年4月21日閲覧).
- * Das, J. P.(1972). Patterns of cognitive ability in non-retarded and retarded children. *American Journal of Mental Deficiency*, 77 (1), pp. 6-12.
- * 藤田和弘(監修), 熊谷恵子, 柘植雅義, 三浦光哉, 星井純子(編著).(2008).『長所活用型指導で子どもが変わる part3 認知処理様式を生かす各教科・ソーシャルスキルの指導』.東京:図書文化社.
- * 伊賀公一.(2011).『色弱が世界を変える』.東京:太田出版.
- * 河野俊寛.(2012).『読み書き障害のある子どもへのサポートQ&A』.東京:読書工房.
- * 文部科学省.(2003).『今後の特別支援教育の在り方について(2003/03/28 答申)』, <http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/law/kyouiku2/index.html> (2016年4月21日閲覧).
- * 文部科学省.(2008).『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』.東京:東洋館出版社.
- * 文部科学省.(2012).『通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について』.

一般的ではなかった授業のユニバーサルデザイン化という立場から、授業実践や研究の成果を学会発表などで発信すると同時に、広く全国の教員と情報を交流し、そこから得られた情報も基に、支援のあり方について考察を行っていく。

謝辞

本調査の機会を与えてくださった公益財団法人日本英語検定協会の皆さま、選考委員の諸先生方、とりわけ、本論文作成にあたりご指導・ご助言をいただいた小池生夫先生に深く感謝申し上げます。また、調査に協力していただいた、寿都町立寿都中学校の生徒のみなさん、後志教育研究会外国語・英語部会所属の先生方には厚くお礼申し上げます。

〈共同研究者〉 函館工業高等専門学校 山下 純一

- 3) 日本語として「中村 洋」を、アルファベットとして「Nakamura Hiroshi」という文字を板書きし、文字の読みやすさを調査した。

- http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/_icsFiles/afildfile/2012/12/10/1328729_01.pdf (2016年4月21日閲覧).
- * 村上加代子.(2012).『日本の英語教育におけるディスレクシア生徒に関する一考察』,神戸山手短期大学紀要 第55号, 67-76.
- * 村上加代子.(2013).『継次処理と同時処理』,『英語教育』2013年12月号, 51.
- * 中村 洋.(2015).『小学校での文字指導のメリットー児童の負担軽減という視点からー』,『英語教育』,2015年8月号, pp.34-35.
- * 中村 洋, 山下純一.(2015).『特別支援の視点を取り入れた英語化の授業の考察ー授業のユニバーサル化を目指してー』,第41回全国英語教育学会熊本研究大会発表予稿集, pp. 440-441.
- * 中村 洋, 山下純一, 沢谷佑輔.(2015).『英語科の授業へのユニバーサルデザインの導入』,第16回北海道英語教育学会研究大会学会発表資料.
- 佐藤慎二, 漆澤奈子.(2010).『通常学級の授業ユニバーサルデザイン「特別」ではない支援教育のために』,東京:日本文化科学社.
- * 瀧沢広人.(2013).『英語授業のユニバーサルデザイン ーつまりきを支援する指導&教材アイデア50ー』.東京:明治図書.